

「陸」東北大会山形吟行会記

松浦 廣江 記

六月二日、東日本大震災後初めて「陸」の吟行会が行われた。東北の人たちは「がんばろう東北」の合言葉を胸に復興に向かって進んでいる。参加者二十八名は山形駅西口に集合した。稲村さんに「快晴まで用意してくれてありがとう」と声をかけて頂いた。本当に晴れ男と晴れ女が大勢おられたのだろう。

一行は上山市にある齋藤茂吉記念館へと向かった。車中で大類つとむさんから「主宰との打ち合わせでは三句出句の予定ですが、三句以上五句まで出句しましょう」とお知らせがあった。

今年、茂吉生誕百三十年という記念の年でもある。茂吉は日本を代表する歌人であり精神科医でもある。歌碑は百二十八も建立されている。記念館は駐車場から橋を渡って入場するのだった。橋の下は何と新幹線が通っていて二万ボルトの電流が流れている。少し足が止まった。記念館の



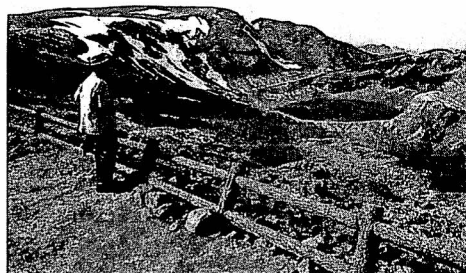
齋藤茂吉の通った小学校

入り口にある茂吉の銅像に迎えられた。木下闇がびつたりの空間、館内は茂吉の業績や生活を伝える資料が収蔵、展示されていた。茂吉の「写生道」に少しでも近づきたい気持ちになった。茂吉に似た短歌ボストがずらんに囲まれひっそりと立っていた。

バスで五分ほどのところに墓所と生家があった。宝泉寺の住職は「茂吉の墓参りには多

くの方が来られるが事前に住職に挨拶に来られた記憶がない」と感心されたということだ。茂吉の墓前に主宰から花と線香を供えて頂き、続いて全員が合掌した。花と絵蠟燭を持ってきてくださった大類つとむさんの心配りに感謝した。寺の隣に小学校と生家が建っていた。今にも茂吉の声が聞こえてくるような生活感があつた。

バスは蔵王エコーラインを走りお釜へと向かった。大雪だった今年は六月にしては多くの雪渓が残っていた。途中には春の草花や樹木の花、新緑が一同の目を楽しませてくれた。なんと蔵王のお釜を雲ひとつない景で眺めることが



お釜を見る中村主宰

できた。何回訪れても遇えない方もおられるとか……陸御一行様はラッキーだった。無事初日のコースを廻り宿泊先のホテルに到着、出句を終えて懇親会が始まった。「大震災があり大変な時期にこうして集まってくれて嬉しい」と主宰の言葉があつた。飲み放

題、しゃべり放題で二時間があつという間に過ぎた。自己紹介の時間などどこかに飛んでしまう和やかな会だった。小菅白藤さんの三本締めでやつとお開きになった。

二日目の句会は主宰挨拶で始まった。「陸」の未来へのテーマを探り続ける人間中村和弘を熱く語られた。参加者二十八名、作品百二十六句。主宰を除く二十七名による五句選の句会が始まった。三時間という限られた時間で行われた吟行句会は「来年の四十周年を成功させよう」との稲村さんの言葉で閉会された。

中村主宰選

吟行句は数年経つとわからなくなるものもある。吟行を離れても通用するかを考えて選句する。

天 蔵王山系耳元で鳴く河鹿かな 上田 桜

蔵王の雄大さと、耳元で聞く河鹿の声の対比が良い。みちのくの暗さ原初性が感じられる。

地 雪形のでふ遊びをりお釜かな 大瀬 響史

雪形は太古からあるもの、蝶との対比が良い。

人 絵蠟燭灯して茂吉の墓参り 上田 桜
「灯して」の「て」は要らない。中七のリズムはくずさない。

秀逸

夏山を指せば茂吉の頭越し 大類つとむ
春ゆかば二万ボルトの句会かな 松浦 廣江
えいっと作っちゃえという句でおもしろい。

夏日かなお釜は重き色したり 古賀 雨苑
夏玄鳥茂吉生家に稚の^や声 稲村 茂樹
「玄鳥」と「茂吉」がつき過ぎの感あり。

蟻が出て記念写真に加われり 若井嘉津子
蟻と人間が同等になっているのがおもしろい。

乱積み の 石垣 低し 檜若葉 伊藤 泰子
石垣をよく見ている。

六月の蔵王嶺生の肌見する 小菅 白藤
「生の」は類想に陥りやすい。

佳作

骨太き写生道なる文字涼し 大瀬 響史
微句ふ茂吉文庫に野間宏 稲村 茂樹
雪溪の鋭き先はお釜向く 十亀カツ子
火の見櫓の鐘垂れている日の盛り 杉山よし江
爆裂の山肌を這う猫柳 杉山よし江
花藤は山の環珞出羽に入る 杉山よし江
茂吉歌碑白つめ草の沸くように 伊藤 泰子
初夏や生きているのかカルデラ湖 佐藤 禎子

高点句

みちのくの背骨に添いて藤の花 佐藤 禎子
風光る茂吉菩提寺低くあり 若井嘉津子

選者選

〈若井嘉津子選評〉

特選

火口湖は神の緑眼夏来たる 中村 和弘
夏玄鳥茂吉生家に稚の^や声 稲村 茂樹
夏山を指せば茂吉の頭越し 大類つとむ
みちのくの背骨に添いて藤の花 佐藤 禎子
花藤は山の環珞出羽に入る 杉山よし江
葉桜や黙すメガネとインクビン 三浦星津女
床板の字余りに鳴る夏館 佐々木露呼
荒壁より茂吉は育ち若葉かな 中村 和弘
小手毬や文庫棚には茂吉の恋 佐々木露呼
微句ふ茂吉文庫に野間宏 稲村 茂樹
薄暑光茂吉手帖に発車時間 若井嘉津子
筆圧の残りし手帳雲の峰 古賀 雨苑
床板の字余りに鳴る夏館 佐々木露呼
葉桜や黙すメガネとインクビン 三浦星津女
夏玄鳥茂吉生家に稚の^や声 稲村 茂樹

稚の姿は見えなかったが良い句。

小手毬や文庫棚には茂吉の恋 佐々木路呼

茂吉の恋は異色だった。

みちのくの背骨に添いて藤の花 佐藤 禎子

〈小菅白藤選評〉

特選 横に広がる茂吉系譜や遠青嶺 稲村 茂樹

「陸」の特徴が出ている。

銅像のメガネ素通し木下闇 大瀬 響史

素直さが良い。

夏うぐいす遠きまなざし茂吉像 小竹ヒサ子

茂吉は偉大な人間であり、心のある人であった。

臨終の部屋の文机 薄暑光 十亀カツ子

母の臨終への想い。

覗き見る茂吉の生家著我の花 中村 仿湖

冷静にものを見ている。著我の花が良い。

〈浅沼眞規子選評〉

特選 六月の木漏れ日に揺るる茂吉像 高橋 善昭

梅雨に入る前の木漏れ日に茂吉の場所に來た興奮が伝わる。

夏深し 緒き地層の火口壁 杉山よし江

「緒き絵」を思い出した。

徹句ふ茂吉文庫に野間宏 稲村 茂樹

歩の強き蟻ゐて山形吟行ぞ 加藤 明虫
土臭さのある山形に來た挨拶句。

火口湖は神の緑眼夏來たる 中村 和弘
神秘的な映像に感動した。

〈稲村茂樹選評〉

特選 小手毬や文庫棚には茂吉の恋 佐々木路呼

茂吉の青春を見た。季語との取り合わせが良い。

木の校舎板の隙より新樹光 小竹ヒサ子

銅像のメガネ素通し木下闇 大瀬 響史

メガネに指を入れたらスーッと入った。現場をスケッチしている。

薄暑光 茂吉手帖に発車時間 若井嘉津子

細かい数字や駅名の書かれた手帖、「薄暑光」の空間の捉え方が良い。

筆圧の残りし手帳雲の峰 古賀 雨苑

〈大類つとむ選評〉

特選 夏玄鳥 茂吉生家に稚^やの声 稲村 茂樹

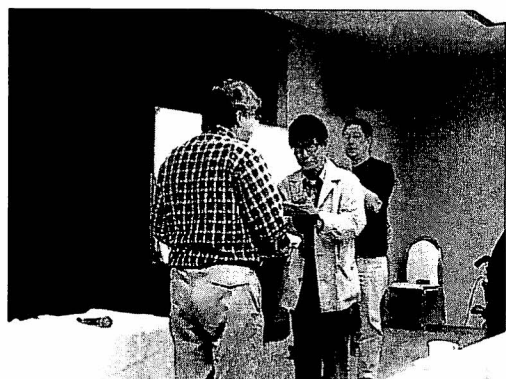
蔵王吟行の参加者にしかわからない句が多かった。

生家は記念館になっている例が多い中で、「稚^やの声」がするのは生き生きと人が住んでいるということですばらしい。

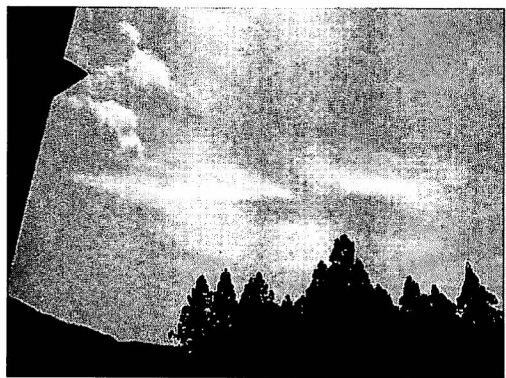
葉桜や黙すメガネとインクビン 三浦星津女



表彰（句会にて）



表彰（句会にて）



翌朝、空に現れた「彩雲」（ホテルから）

〈中村仿湖選評〉

徴句ふ茂吉文庫に野間宏 稲村 茂樹
死後のごと開く火口や夏初め 大類 準一
臨終の部屋の文机薄暑光 十亀カツ子
特選 床板の字余りに鳴る夏館 佐々木路呼
風を感じた。

夏山を指せば茂吉の頭越し 大類つとむ
遠近感がある。

雪溪が白龍となり火口湖へ 小竹ヒサ子
遠くに雷雲が見え、雪溪が龍になった。
筆圧の残りし手帳雲の峰 古賀 雨苑
茂吉の字を「筆圧」で表した。

蒼天にほうと息つく朴の花堀 尚子
名前が「ほうこ」なので頂いた。「蒼天や」が良いか。
三重県から参加したが季節が一カ月ぐらわずれていて景色を見るのが楽しかった。良い吟行ができて感謝している。